

強制収容所内の信仰と宗教

—アメリカの日系人博物館を通して考える日系人の多様な宗教経験—

エミリ・アンダーソン

(全米日系人博物館 学芸員)

はじめに

企画展、「経と聖書：信仰と日系アメリカ人の第二次世界大戦中の強制収容 Sutra and Bible: Faith and the Japanese American World War II Incarnation」はロサンゼルスにある全米日系人博物館で2022年2月26日から2023年2月19日まで博物館と南カリフォルニア大学伊藤真聰日本宗教・文化研究センターの共同企画として開かれた。

ロサンゼルス中心のビジネスマンや元アメリカ兵の日系二世が協力して、1992年に設立した全米日系人博物館は、開館以来一般来館者に日系史、特に収容所経験、を通して日系人の存在、差別経験、アメリカへの貢献、そしてまたアメリカの民主主義が掲げる多様性と、その危うさなどを訴えてきた。展示と共に何十万もの史料が保管されている。史料は個人の日系人が寄贈した一般移民の持ち物が主で、忘れられてしまった人の歴史—余白^{マージン}に置かれた人たち—を重要視している。



全米日系人博物館

宗教をどう（なぜ）展示のテーマにするか

博物館では真珠湾攻撃から収容所に至る過程を、何度も、いろいろなテーマを通して展示してきた。しかし、宗教に注目するのは今回が初めてであった。様々な展示の経験を持ち近代日本キリスト教研究を専門とする当館学芸員エミリ・アンダーソンと、仏教史が専門で日系仏教徒コミュニティとの関わりが深いダンカン隆賢ウィリアムズ（南カリフォルニア大学教授、同大学伊藤真聰日本宗教・文化研究センター、ダイレクター）が、協力しながら、日系人にとっての宗教の重要性や、こういった「もの」（史料）が存在し、どのように宗教の儀式や教えをうまく来館者に伝える事ができるかを考えた。さらに、ウィリアムズが長年の研究や調査を重ねて出版した、日系仏教徒の収容所経験に焦点を合わせた書籍『アメリカン・スートラ：第二次世界大戦における信仰と自由の物語 *American Sutra: A Story of Faith and Freedom in the Second World War*』の成果をも用いながら、展示のプランを検討し、構成した。

今では第二次大戦中に西海岸在住の日系アメリカ人おおよそ12万人（うち3分の2がアメリカ市民）が、内陸部に築き上げられた収容所に監禁され、その「容疑」は日本人を先祖に持つ事以外何もなかった事は紛れもない事実とされている。何故日系人だけがこのような圧倒的で差別的な制度の対象になったのか——例えば同じく敵国であったドイツ系やイタリア系のアメリカ人の扱いは異なっていた。そこには様々な要因があり、宗教もまた一つの重要な要因であったが、そうであるにもかかわらず、これまで十分に注目されてこなかったといえる。また、このことは、“信仰の自由”を憲法に定め、これを根本原則として掲げながらアメリカの民主主義を唱えるアメリカ人からしてみれば、理想を覆す、あってはならない差別にあたることになる。

日系人口の大多数が仏教徒であった事は差別の理由にもなった。信仰の自由が憲法で定められても、一般的にはアメリカはプロテスタント・キリスト教の国とされ、



「経と聖書」展の掲示用イメージ

南ヨーロッパやアイルランドのカトリック系移民でさえ相応しくないとわれがちであった。黄色人種で仏教徒の日本人移民は何をしても同化が不可能な人たちとされていた。日系移民のように白人でもなく、マイノリティ宗教を「信じる」マジョリティの移民コミュニティがアメリカに現れる際、多民族・多文化・多宗教を理想として掲げるアメリカが耐えられるか。第二次世界大戦の日系人の経験、そしてその中での宗教の関わりを辿っていく事によって、日系人にとって宗教という概念の重要性、さらに宗教や「信仰」を巡る文化的・政治的価値観の働きを探る機会が与えられる。かつ、日系アメリカ人のこの辛い経験を振り返ることは、戦争のような危機的状況において、いかに多様な人種、多様な宗教の共存を守り通し、いかに権利の平等という理想を遂行できるのかという、きわめて今日的で現実的な課題を、真剣に考えることにもつながっているのである。

移民にとっての宗教の役割

明治時代に移住した大多数の日本人は仏教徒であったが、日本で暮らしていたときには、自覚的に仏教に対して宗教的な信仰を持っていたというよりは、家族や村が行う行事や儀式、葬式や先祖祭祀を行い、あるいはご利益を願うなどといった形で、仏教と関わっていたと考えられる。しかし、渡米すると異文化・異宗教を持つ者として差別を受けるようになり、今まで頼りにしていた親族やコミュニティと遠く離れた状態において、宗教団体が与える物質的・精神的な支えを求めるようになった。すでに日本に宣教師を送っていたアメリカのキリスト教の教派が、アメリカ西海岸に集まり出した日系移民むけの伝道や物質的な支援を開始し、さらに日本から日本人のキリスト教の牧師が移民を追うように渡米して移民用の教会を設立するようになり、説教や伝道だけでなく英語学校や下宿など、移民が必要とするサービスを提供し始めた。仏教の各宗も、後から移民の依頼を受けて開教師を送るようになり、特に葬式など不可欠な行事を執り行い、また日本政府との連絡など重要な役割を果たすようになった。初期の移民は、出稼ぎや留学を目的として、短期間滞在する予定でいた男性が主だったが、より長く滞在する事になった人たちが日本から嫁を呼び寄せるようになり、後にはアメリカ市民権を持つ子供たちが生まれるようになった。この「二世」は人種差別を受けながらも他のアメリカ人の子供同様に学校に通い、ボーイスカウトやガールスカウトに参加し、ほとんどが英語しか話せないアメリカ人として育った。二世の数が増えるにつれて、宗教団体の側も変化の必要性を自覚するようになり、英語の礼拝や日曜学校を始めたり、地域中の二世が同じ宗教の若者と集まれる団体などを立ち上げた。

このような歴史を展示で伝えるためには目で見えて内容を分かりやすく伝える写真や

史料を必要とする。例えば下掲のように独特な建築の教会や寺院、また印象的な集団写真を選んだ。



奥村多喜衛が設立したハワイ州ホノルル市にあるマキキ教会
写真：Courtesy of Mitch Homma



本派本願寺ハワイ別院、ホノルル市
写真：Courtesy George Tanabe



Japanese American Young People's Church Annual Conference, Berkeley, California, 1939.

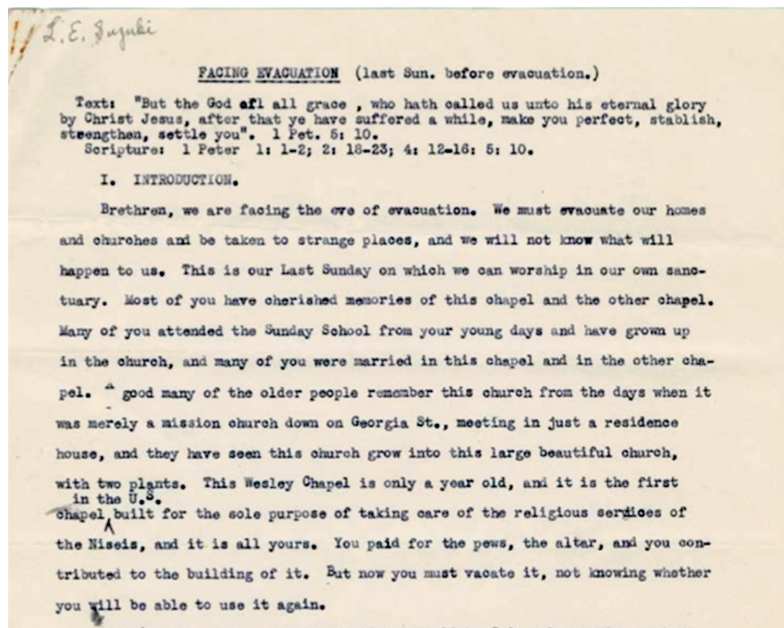
Photo: Japanese American National Museum, Gift of Rev. Sadaichi Asai (2000.354.7)

本展示に特有の課題

展示は本と違い、良い「物語」が存在しても、それを物質的に表す「もの」が存在しないと伝えられる内容が限られてしまう。例えば「経と聖書」という本展示のタイトルから明らかなように、この展示では主に仏教とキリスト教に注目した。もちろん、実際には天理教、金光教など他の宗教の信者も移民の中にいた。しかし、一般のアメリカ人の来館者に対しては、前提として天理教や金光教がどのような宗教であるのかを丁寧に説明する必要がある一方で、展示スペースには限りがある。このため、来館者が多少なりとも知識を持っているであろう仏教とキリスト教に焦点を合わせた展示とすることにした。

さらに展示のテーマを宗教に絞るとさらに展示範囲が難しくなる。例えば宗教の儀式や集まりは何かを見るだけでなく、説教を聞く、お経を読む、讃美歌を歌う、お香を焚く、といった行為をも伴うものであり、固定された展示物だけでは伝わらないものがある。宗教、また宗派の違いによって存在する史料の「面白さ」の違いも現れてくる。豪華な建物を持ち、法衣や祭服に身を包んだ僧侶・神父が、様々な道具を用いて儀式を執り行うカトリック教会や仏教と比べて、装飾を意図的に避けるプロテスタント系のキリスト教会とでは、来館者の目を引く展示できる「もの」の質が大きく異なってくる。

博物館の書庫に寄贈された貴重な史料として、プロテスタント教会の牧師たちが当時の試練にどう対応したかを表すものがある。例えば強制立ち退き直前の日曜礼拝で行われた説教の原稿である。しかし、それらは、全てタイプされた活字の原稿で、一見して目を引くようなものではない。展示してもケースの隣まで寄って原稿を読んでもみないと重要性がわからない。さらに言えば、説教は読むものではなく、聞くものである。こうしたことを考え、説教を書いた牧師たちの子孫らと連絡が取れたので、合計四人の牧師たちが書いた説教を朗読してもらって録音し、その録音を再生することによって、この「もの」を展示した。



Rev. Lester Suzuki sermon

収容生活

収容所に集められた日系人は、最低限の生活を維持するものしか与えられず、それ以上のものは自分達で作るか、探すかするより他に手段はなかった。あつという間に全てを失った人たちにとって、安定感のある生活をどう取り戻すかが第一課題だったと言えよう。この中で、宗教団体は欠かせない存在であると同時に、その宗教の教えは、突如として混乱した世界に投げ込まれた人びとに、僅かな慰めを与えたであろう。

牧師や僧侶が、収容所内での教会設立許可を貰い、毎週の礼拝や日曜学校、さらに結婚式や葬式など重要な行事を行なった。また、素人仕事によって、捨てられた木屑などから仏壇、神棚、十字架など信仰のためのものを作成した人びともいた。



果物クレートから作られた仏壇



マンザナー収容所の仏教会で行われた葬儀

ハートマウンテン須弥壇

収容所内で作られた仏壇が幾つもある中、その大きさや技術で目立つ「もの」がある。それはワイオミング州ハートマウンテン収容所で、宮大工であった西浦兄弟が作った須弥壇であり、収容所の仏教会で使うために合計4台が作られた。博物館に寄贈され、展示された須弥壇は、戦後、カリフォルニアの仏教会で長年使われていたものである。



ハートマウンテン須弥壇

「経と聖書」

様々な貴重な史料が展示された中で、特に焦点を当てた「もの」が、本展示のタイトルにもある「経」と「聖書」を代表する「ハートマウンテン経塚」と「北地聖書」である。両方とも収容された日系人が厳しい環境の中で知恵を絞り、信仰を深めるために作ったものとされる。さらに両方とも永久に失われそうになり、奇跡的な偶然の

お陰で見つかり、保存される事になった。

仏教を代表した「経」は謎に包まれたものであった。第二次世界大戦が終わり、強制収容所が閉鎖された後、そこに建てられていたバラックや土地が買収された場合があった。ワイオミング州の元ハートマウンテン強制収容所だった土地も買収の対象になり、墓地だった部分がボヴィー夫妻の手に渡った。畑にするために機械で土地を整地していたところ、いきなり機械が何かにぶつかった。作業員が機械から降りて見てみると、石油などを貯蔵するためのバレルが地中にあり、その中に入っていた何百個もの石の一つ一つに、墨で漢字が書かれていたのである。戦時中にそこで日系人が収容されていた事を知っていたボヴィー氏はバレルごとその石を掘り出し、不思議に思いながらガレージに移した。何十年もこの「謎の石」はそのまま彼のガレージに静かに保管された。以前収容されていた人たちが自分の経験をもっと知ろうと何十年ぶりに当地を訪れるようになり、ボヴィー夫妻と親しくなり、夫婦はその人たちに石を分けた。1990年代にロサンゼルス在住の日系人がハートマウンテンで使われて、まだ残っていたバラックを購入し、これをロサンゼルスに移設するために当地を訪れた際、ボヴィー氏は何百個と残っていた「謎の石」を、1992年に設立されたばかりであった全米日系人博物館に寄贈する決意をし、バラックの板と一緒に石はワイオミングを去った。「謎の石」(Heart Mountain Mystery Stones)はバラックと一緒に展示され、レプリカが博物館の売店で売られるようになった。



ハートマウンテン経塚

2001年に、愛知学院大学の森祖道教授（現在は同大学名誉教授）が、偶然ロサンゼルス在住の娘を訪問中に博物館を訪れ、「謎の石」を見た瞬間に、これは経塚ではないかと思い、その後何年もかけてこの謎を解く研究に挑んだ。博物館に寄贈された656個の石に書かれている漢字を全て記録に取り、コンピューターによるデータ解析を専門とする同僚の助けを得て検討したところ、この石一つ一つに書かれた漢字が法華経に当てはまる可能性が強いと分かった。謎をさらに解く鍵が収容されていた人たちから発見された。その中に日蓮宗の僧侶であり、ハートマウンテンの書道教室を指導した村北日鑑という人物がいたのである。森教授の何年にもわたる丹念な調査の結果、この謎の石の正体が判明した。以前の展示とは違って、今回の展示ではこれらの石を、宗教心の表れとして作成された経塚として紹介することができたのである。

特に焦点を当てた聖書も特別な歴史を持つ。後に救世軍の小隊長となる北地満寿夫は、和歌山県出身の移民で1915年、18歳で渡米。先に移住した父の店を手伝いながら学校に通った。最愛の妹の病死がきっかけで一時期失望し、酒に溺れて交通事故で重症を負った事が人生の分岐点になった。事故の現場に偶然居合わせた救世軍の人に励まされ、自分も救世軍に入団する決意をした。オークランドやサンノゼで二か国語伝道を行う過程で二か国語の聖書の必要性を感じ、自分で作成する決意をした。英訳が片方に印刷された聖書に日本語訳を手書きで加え、こまめに説明やイラストなども



北地聖書

足した。北地は1935年頃にこの作業を開始し、戦争が勃発して、アリゾナ州のポストン収容所に収容されても作業を続け、1944年に完成させた。戦後さらにもう一冊の聖書の制作を手掛け、亡くなる1973年まで作業を続けた。

その後、何十年もこの2冊の聖書の行方はわからないままだった。2017年にリサイクル用のゴミ箱に捨てられているのが発見され、オークションにかけられる寸前に親族に知らされた。オークション店との交渉などを経て、聖書は親族の希望によりスタンフォード大学のフーバー・コレクションに寄贈されることになった。

アマチ慰霊塔・慰霊碑

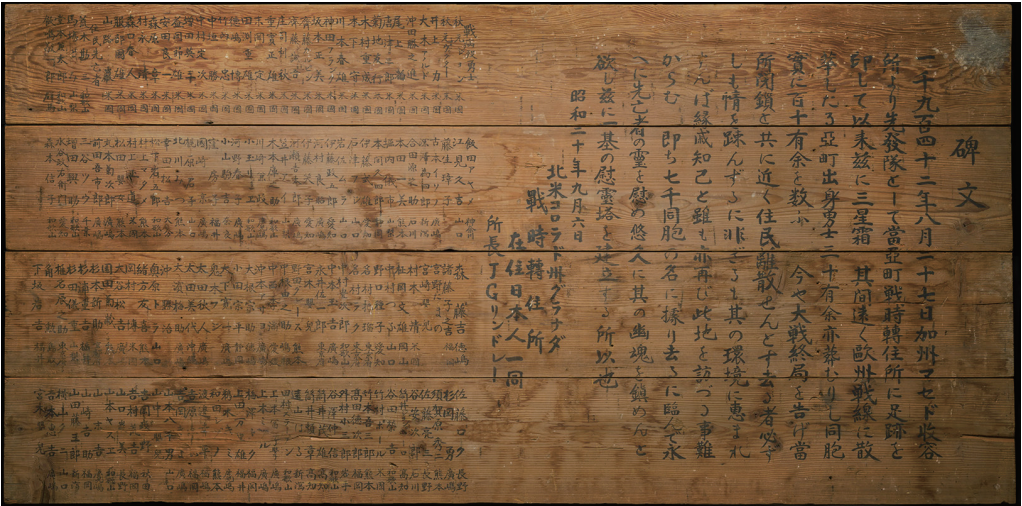
亡くなった人の霊を祀るという大切な仕事を収容所でどう行うか。収容所の閉鎖を迎えたコロラド州のアマチ収容所の住民は、その地で命を失った者、さらにそこから出兵し戦場で亡くなった日系兵士が忘れられないように、慰霊塔と慰霊碑を残した。慰霊塔に書かれた字は和田正彦牧師が手掛けた。

最後に、展示の一部として作成された「慰霊壁」を紹介したい。展示された史料の一つに、戦時中ハワイで一人残っていた日本人の開教師がハワイ出身の二世戦死者のために作った塔婆があった。この塔婆を見た展示のデザイン担当者が、収容所や抑留所の名前が書かれている塔婆で出来た「慰霊壁」の作成を提案した。博物館の近くに



アマチ慰霊塔

ある禅宗寺の小島秀明師に塔婆の作成を依頼し、日系人が戦時中収容された30ヶ所の施設を慰霊する慰霊壁が完成した。来館者の多くは日系人で、自分、または親族が収容された施設の名前を探し、その前で写真を撮るなどしており、この展示のために作られた塔婆の「慰霊壁」も大きなインパクトがあった。



アマチ慰霊碑



慰霊壁

アイヌ文化展示が照らす日本・東アジアの宗教

北原 モコットウナシ

(北海道大学アイヌ・先住民研究センター 准教授)

はじめに

2008年に、アイヌ民族を先住民族とする国会決議が可決されて以来、国内における政策にも進展があり、2020年にはアヌココロ アイヌ イコロマケナル（国立アイヌ民族博物館）を含む、民族共生象徴空間、愛称ウポポイが開設されました。また、民間でも様々な書籍の刊行を始めとした取り組みや発信がされる中で、アイヌ民族やアイヌ文化一般に対する関心が高まりつつあります。

ところで、こうした博物館等で扱う「アイヌ文化」は、しばしばその「独自性」が語られ、日中韓の文化や琉球文化とは別個の、明確に他と境界線を引けるものとして紹介されることが一般的ですし、そのように理解されることも多いと感じます。さらに、日中韓の文化が「農耕文化」だとすれば、アイヌ文化やシベリア・カムチャツカの諸文化は「狩猟採集の文化」であるとされ「狩猟民的な世界観」という言い方もされるように、生業の違いが精神文化にも反映していると言われることがあります。そうした捉え方に一定の意義がある場合もあるかと思いますが、十分な学問的検討を経ずにそのような差異を強調すると、それぞれの文化に対するある種の先入観や、場合によっては偏見を形成する一因ともなります。

報告者は、アイヌ民族の宗教や神話を研究する立場から諸文化を見渡すとき、各民族の文化的な個性を感じる一方で、抽象的なレベルでは共通する点が多く、さらには信仰に伴う物質文化の中にも非常に類似したものが見られることを知りました。これらに注目することは、互いの文化を鏡にして自文化の深い省察と理解を促し、更には相互の文化が同じ東アジアや北東ユーラシアといった地域の中で構築されてきたものであり、高い共約可能性を持つことを実感する機会ともなります。このように、宗教についての研究・展示は、当該領域の研究推進にとどまらず、意識の仕方・目標の設定によっては民族間の偏見解消や民族共生といった大きな社会的課題の解決にも資することができると考えます。そのような問題意識に立ち、ここでは、イコロマケナル（国立アイヌ民族博物館）の展示構想と展示品製作にかかわった経験から、

イナウ、イクパスイなどいくつかの具体的なモノと展示を紹介しながら、アイヌ文化研究から見た日本・東アジアの宗教について述べてみたいと思います。そして、そのような文化的連続性は、さらに広い地域につながっていく可能性を持つことについても、若干の指摘をしたいと思います。

1. アイヌ民族について——地理的・歴史的状況

日本列島と大陸に囲まれた地域は、約2万年前の氷期には、北からつながる半島状の地形を形成し、対馬海峡などかなり接近したと言われています。この地域を「環日本海地域」と呼ぶとすると、アイヌ民族はその北辺、樺太島（ヤンケモシリ、サハリン）から北海道（ヤウンモシリ）、千島列島（ルトム、クリル）、本州（サモロモシリ）の東北北部に暮らしてきました。現在の日本列島には、旧石器時代のころから南北の道を通して数次にわたる人の流入があったと考えられており、こうした人々の営みの中で、アイヌ語、日本語、奄美・琉球語を話す集団が形成されてきたと考えられます。アイヌ語の使用をうかがわせる資料としては、712年に成立したとされる『古事記』などに記されるアイヌ語の地名があります。それ以来、近世までは東北でも、20世紀までは北海道や樺太で、アイヌ語が使用されてきました。

アイヌの居住地の南には、シサム（和人または和民族＝日本語びと）や奄美・琉球の人々など日本列島内の諸民族、朝鮮半島の人々が暮らし、アイヌの北には樺太島内にウイルタ、ニヴフといった民族、アムール川流域のナーナイやウデヘといったトゥングース系の言語を話してきた諸民族（ウイルタ語もトゥングース諸語）、さらにイテリメンなどカムチャツカ半島の諸民族が暮らしてきました。13世紀になると、当時の元朝がアイヌと接触し、それ以来、アイヌは明や清などと朝貢関係を結んできました。また、17世紀の半ばにはロシアもこの地域に到達し、18世紀以降は主として千島列島を通じて南下し、北海道のアイヌとも接触するようになりました。

これに対し、14世紀には東北地方のシサムの一部が北海道南部の函館周辺に拠点を築くようになり、17世紀以降は松前藩を形成して、幕府の認可のもとアイヌとの交易を独占するようになりました。このように、道南と呼ばれる地域には中世からシサムの暮らしがあったものの、北海道在住のシサムもその土地を「蝦夷地（野蛮人の住む土地）」と呼び、意識の上では本州に軸足を置いた生活をしていたと考えられますし、江戸時代に流通していた日本の地図には現在の青森から九州までしか描かれておらず、北海道以北や琉球は国の外に位置づけられていました。

アイヌ民族の信仰をはじめとする文化や歴史は、こうした地理的環境の中で形成されてきました。近代に入ると、日本も近代国家を形成し領土確定と植民地獲得をはじめます。明治の初期に北海道と琉球が日本の版図に組み込まれ、やがて樺太・千島や、

台湾、朝鮮半島も植民地となりました。アイヌ民族が今日的・法的な意味で「先住民族」と呼ばれるのは、この時代に、近代国家に取り込まれたことに端を発します。

これ以後、日本は近世までの政策を大きく転換し、北海道以北に大量の移民を送り込むようになり、アイヌの居住地にシサムをはじめとする南方の諸民族が大挙して移り住むようになります。アイヌ史のもう一つ大きな出来事は、第二次世界大戦における日本の敗戦です。これによって樺太・千島はソビエトの占領下に入り、この地域に移住していた40万人を超すシサムとともに、同地のアイヌも、ほとんど全てが北海道以南に移り住みました。私の祖母は樺太西海岸出身のアイヌ、祖父は北海道から樺太に移住していたアイヌでしたが、敗戦の年に北海道の余市町に避難し、以後私の一族はほとんどが日本で暮らしています。

2. 「アイヌ民族の宗教」

上記のように、アイヌ民族の歴史は（一般には周囲から隔絶して来たと考えられています）、常に周囲の他民族との接触・交流の中で営まれて来ました。ですから、中世や近世にアイヌ社会に入ってきた日本の信仰やロシア正教に加え、今日では新宗教や新新宗教なども広まり、アイヌ社会の宗教的状況は多様化しています。

一方、このように外から入ってきた時期や経緯が明確な要素を除く、在来的な信仰の中にも、周囲との接触によって形成されてきたものが多く含まれていると考えられます。たとえば、図に示すような木製の像があります（図1）。像と言っても、アイヌ文化における位置づけを知らない人から見れば、刻み目が付いた木の切り株にしか見えないでしょう。これは、20世紀初頭に樺太で作られたもので、流行病などを遠ざける守護神です。マツなどを根のついたまま掘り起こし、逆さにして屋内や村の入り口などに立てて祀ります。正面にある刻み目は、目鼻に見立てられていて、この部分に酒や食物を付けることでこの像に捧げることができると言います。実物としては未見ですが、こうした像により具象的な人面を彫った物もあり、ナンコロペ（顔を持つもの）という呼称もあります。個人的なことで恐縮ですが、私の地元の文化として思い入れもあります。一方でアイヌ文化全体から見ると、この像には疑問がわくところもあります。例えば、北海道では、和文と同じく「逆柱」を嫌う習慣があります

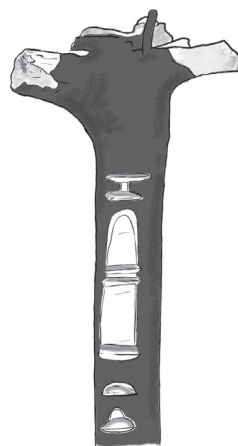


図1 樺太西海岸来知志村 敗戦後

から、その立場からすればこのような根を上にして立てた像はまがまがしいものに映ります。

一方、ユジノサハリンスクの博物館に行きますと、ニヴフの資料としてほぼ同じ形をした像が展示されています。また、大陸のウデヘ文化や朝鮮半島の文化、またシサムのうち秋田県の文化にも同じような木の根を使った逆木の神像があります。そして、この地域の歴史を知るうちに、この神像の分布に、意味のあるつながりが見えてきました。例えばアイヌとニヴフは様々な文化を共有してきましたし、アムール川流域の諸民族や朝鮮半島の人々、本州のシサムとも接点や交流がありました。また、ウデヘなどの諸民族も、朝鮮半島の古代国家や中国の諸国家との交流があり、渤海のように朝鮮の古代国家が環日本海地域を北回りで往来したと考えられるケースもあります。

つまり、一見アイヌ文化や日本文化の中では異質に見える「逆木の神像」は、造像の様式や用い方において共通する神像の分布域の一部であると見ることができます。可能性として、アイヌ文化や日本文化とは異なる地域で成立した神像の様式を、環日本海地域を通じた交流によって受容したと考えれば、逆柱の忌避など、他の宗教的な慣習と矛盾するかなのようなあり方も説明がつきます。このように、アイヌの信仰を内から見ていくことだけでなく、通文化的な比較によって外から見ていくアプローチによって、相互の宗教について理解が深まることが期待されます。私は、以前はもっぱら内からのアプローチをしていましたが、近年はより広い地域の中でアイヌ文化を見ることに関心を持っています。イコロマケネルでの展示でも、交流史や通文化的比較の視点を盛り込んでいただけるようご提案しました。

3. 在来的な信仰

3-1. 世界観と神観

アイヌの在来的な世界観には、垂直的世界観と水平的世界観が重なっています。前者は「天」や「地下」など、人間界から見て垂直の方向に異世界が存在するとする思想で北方的とされるもの、後者は海の向こうや深山など水平方向に異世界があるとする思想で南方的とされるものです。この2重の世界観を知っておくことは、儀礼や神話を理解する上でも重要になるため、イコロマケネルでも大きな図版を入れたパネルや動画で解説しています（図2）。

また信仰のあり方としてはアニミズムとシャマニズムの要素を持つため、自然界の様々なものに神性を認めます。人の生活は、神々の恩恵によってあると考え、報恩のための儀礼を行います。また、しばしば天然痘など恐ろしいものを神として祀ることもあります。恐ろしいものに対しては、遠ざける対処法と、祈りによってコミュニケーションをはかり、人間の意に沿って振舞ってくれるように働きかける対処法があります。

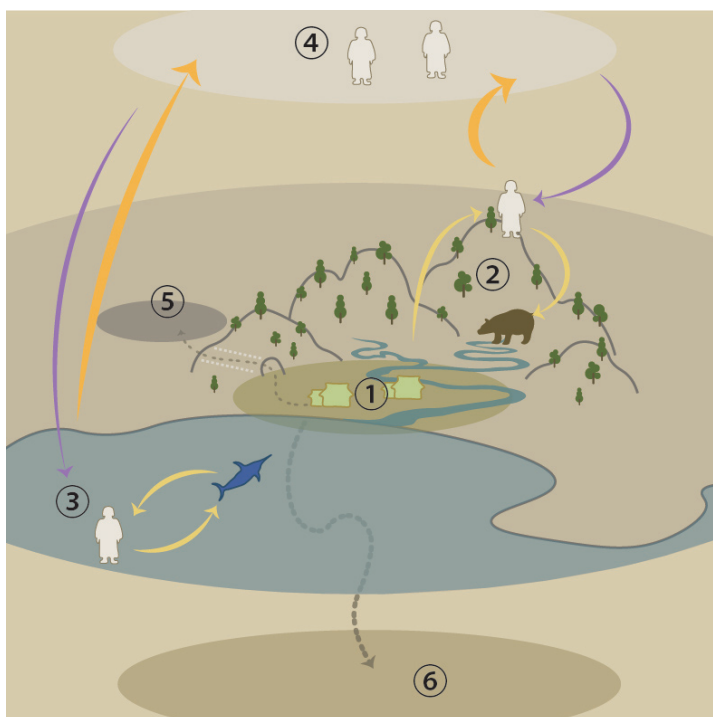


図2 水平的／垂直的世界観

①人里 ②山の神界 ③沖の神界 ④天界 ⑤他界 ⑥地獄

このように人と神は対置されて語られますが、一方で各家系の祖先をたどると何らかの神に行きつくとも言い、また人が死後に子孫を見守るとか、神に列せられることもありますから、人と神は連続的な存在でもあります。儀礼の場での神は威厳をたたえた存在とされますが、神話の中では人間的に振舞い愛嬌を感じさせることも多くあります。また、神々には性別があり、人間と同じように婚姻関係を持つなど、神々の社会を形成していると考えられます。もっとも、神の観念も統一的・普遍的なものではなく、地域によってしばしば大きく異なり、おそらく歴史的にも変化してきたでしょう。例えば、最も重要とされるのは火神ですが、北海道の東部から北部では、囲炉裏の中に男女の火神が鎮座するとされるのに対し、樺太や北海道西部では火神は女神で、しばしば家の守護神を伴侶とするといわれています（図3）。

こうした様々な点は、定島（1995）や三橋（2007）に見る神道の特徴とも、大部分が重なるように思います。もっとも、アイヌの儀礼はシャマンの儀礼を除けば、神主や僧侶のような専門職が執り行うものではなく、男性であれば誰でも実践します。また、近代以前のアイヌ社会には貧富の差はあっても制度的な身分はありませんから、王族もいません。したがって、皇祖神のような神格也没有。

女神



夫婦神

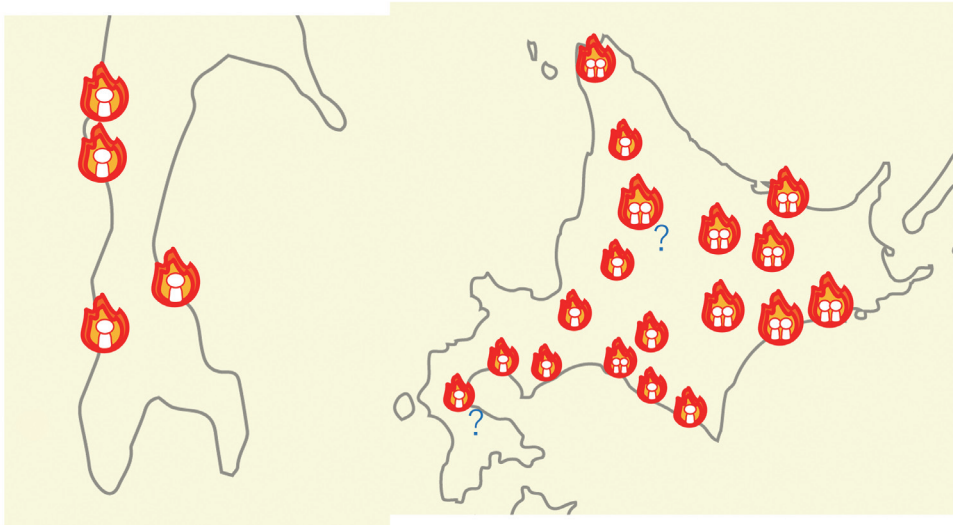


図3 火神観念の地域差

3-2. 儀礼

久保寺逸彦先生が、北海道太平洋岸の沙流川流域で調査をした際に、このような逸話があります。久保寺先生がサイダーを飲んで、びんを捨てると、同行していたお婆さんに叱られたそうです。ゴミを捨てたので叱られたのかと思ったら、そうではなく「このびんのおかげでサイダーを飲むことができたのだ、放り投げるのではなく礼を言ってそこに置きなさい」ということなのでした。このように、ちょっとした折に感謝を告げることも広義の儀礼と呼ぶことができますが、もう少し改まって行われる儀礼には、年中行事のように1年のサイクルにそって行われるものがあり、例えば春と秋の大祭、植物の採取を始める時期、畑作を始める時期、魚の遡上の時期に行うものなどがあります。春秋に大きな儀礼を行うことは、夏至・冬至と関わるのではないかと思います。アイヌ語にも12か月の月名がありますし、影の長さを測ることで夏至・冬至を観測したと思われる習慣もあります。生業と結びついた儀礼は、おおよそ決まった時期に行われます。このほか、クマなどの重要な動物が獲れた時や、冠婚葬祭などは必要に応じて行われます。

儀礼の中心は、祈り詞を唱えることと、神酒や後に述べるイナウを捧げることです。神々に囲まれて暮らしているといっても、日常的に全ての神に祈るわけではなく、祭祀の対象は生活に関わりのある神です。また、動植物は生活する上で重要な存在です

が、人が直に接する動植物とは別に、それらを統べる観念上の神がいると考えられ、年中行事で祈願をするのは主に観念上の神格です。

3-3. 送り儀礼

年中行事に対し、人間が入手した自然物に宿る靈魂（神）を、神界に送り返す儀礼があります。例えば、日常の器物は人々が自製し、使用を終えると神界に送り返します。船であれば、山から切り出した樹木から作るため使い終えた船の靈魂は樹木の世界へ、樹皮を用いた衣服も樹木の世界へ送り返すという例があります。また、狩猟などで動物を得ると、小動物の場合は比較的簡素に行いますが、クマなどの場合は、近隣からも人を呼び、多量の供物を用意するなど、儀礼の規模が大きくなります。シマフクロウの送り儀礼も重要とされますが、供物の量などで考えると、クマの方が盛大ということもできるように思います。

クマに対する儀礼には、狩猟で得たクマを対象とするものと、子グマを飼養して行うものがあります。クマを対象とする儀礼は本州を含め、ユーラシアから北米にかけて広く見られますが、飼いグマ送りはアイヌからアムール川河口部のいくつかの民族にのみ行われてきました。イコロマケンの基本展示場には、飼いグマ送りのための子グマを繋ぐ杭や、子グマのための装飾が展示されています（図4、図5）。これら



図4 北海道博物館収蔵 資料番号 89525
熊つなぎ杭模型 L60W2 (2)

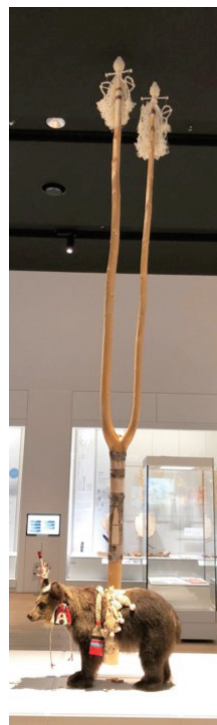


図5 クマ繋ぎ杭とクマの装飾
国立アイヌ民族博物館 基本展示室

は樺太アイヌのもので、この杭は本来は10mほどの高さがあり、クマの装飾とともに樺太北部からアムールの諸文化と共通性を示すものです。北海道に移住した樺太アイヌによって、1960年頃に作られたのを最後に、作られなくなりました。クマ送りが行われなくなったことと、差別や抑圧により、信仰や言語を維持することが難しくなったためです。イコロマケナルやウポボイはアイヌ文化復興の拠点と位置付けられ、こうした文化の取り戻しが基本的な機能の1つです。その展示を象徴するものとして、同館の開館にあわせ、研究者の記録や写真、博物館資料をもとに製作しました。クマの頭飾りやクマの帯など、いずれも現代の工芸家は使っていない技術が用いられており、資料の観察を通じて技術も復元しました。

4. イナウ

先ほどのクマを繋ぐ杭の先端に結ばれていたものをイナウと呼びます。樹木を乾燥させ、表面を小刀で削って房状にしたものが多く見られます。同じイナウという名称でよばれるものにも、形や大きさが様々にあり、形の違いには象徴的な意味がこめられています。ごく単純化していうと、大きくて複雑なものほど良いイナウで、またイナウにも性別があり、祈願の場にふさわしいものを使うことが大切だとされます。かつての研究では「依代」と解釈されたこともありましたが、イナウの基本的な働きは神へのメッセンジャーであり、またそれ自体が贈り物ともなることです（図6）。

イナウの形は、18世紀の末ころから記録が残っていますが、そのころには比較的明確な地域差が確認できます。そこで、イナウの形、意味づけ、用い方を比較することでアイヌ文化内部の多様性を見ることができます。大まかに言うと、イナウの共通性から北海道を南西部と北東部の2地域に分けることができ、北東部は樺太とも連続性を持っています。

また、アイヌより北方のニヴフやウイльта、ウリチ、オロチョンなどの諸民族にも見られ、南のシサムでは民間信仰や寺社の儀礼に取り込まれている例があります（図7、図8）。さらに台湾、ラオス、ボルネオ、インド、オーストラリアなど、アジアに広く類似の木製品が見られます。ユーラシア

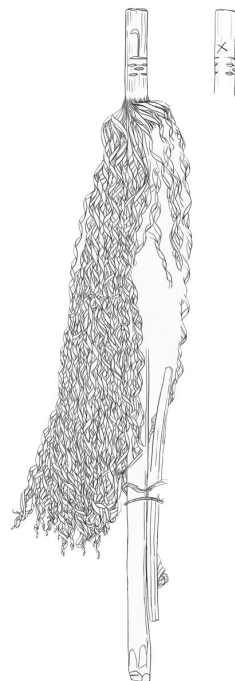


図6 北海道アイヌのイナウ
北海道大学植物園収蔵 資料番号 10722

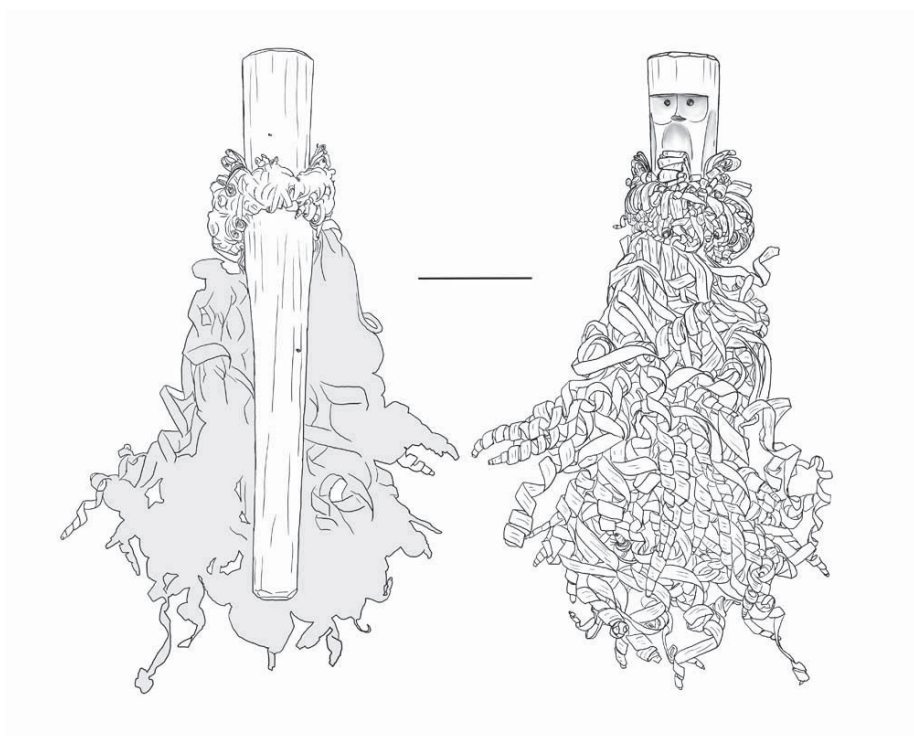


図7 ウイルタのイッラウ 北海道大学植物園収蔵 資料番号 33725



図8 シサム（秋田県）梵天
国立民族学博物館収蔵

西部のハンガリーやジョージア、フィンランドでは、在地の信仰やキリスト教と結びついて使われています（図9）。聖水を撒く器具として、イナウに酷似した木製品が使われることもあります。このような東西の共通性が、これまで注目されてこなかったのは、ある民族の文化とは個別・独自のものであるという先入観の影響も大いにあるでしょう。イコロマケナルでは、イナウとあわせて、ハンガリーなどの類似の木製品を展示しています。

5. イクパスイ

儀礼の際の重要な供物として神酒があります。神酒はトゥキと呼ばれる漆碗に注がれ、イクパスイやイクニシと呼ばれる筥状の木製品で振り撒くことで神々に届くとされます（図10）。トゥキは日本語の「杯（つき）」の借用語だとされ、漆碗と、それを乗せる天目台も日本から交易によって得たものです。天目台は本来は焼き物の茶碗を乗せるもので、アイヌとの交易によって漆器の産地にも刺激が加わり、対アイヌ用に新しい様式を生み出したと言われています。ただ、この台の形や碗状の器との組み合わせは、仏教の洒水器や吉田神道の護摩壇に用いられるものとも共通しています。より深い探求をすることで、こうした器と台のペアが生まれた背景がさらに分かるかも知れません。

また、イクパスイはアイヌ民族が自製してきた物で、文献上の初出は16世紀、考古資料によっては15世紀から10世紀頃まで遡るのではないかとされています。イクパスイの先端を、酒器の中の酒に浸し、

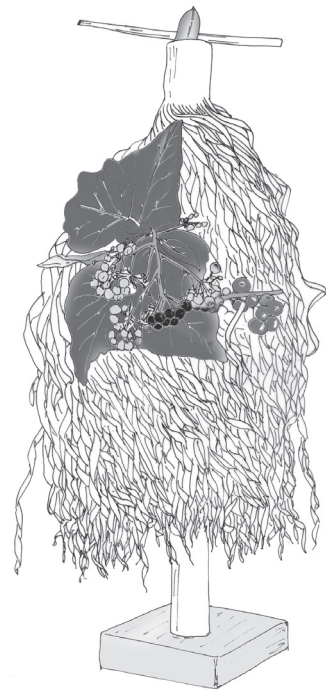


図9 ジョージアのチチラキ
今石みぎわ氏作図



図10 右手にイクパスイを持ち、
祈願をする男性

祭壇や神のいる場所に酒の滴を振りかけます。実は、この形状や用い方は、真言宗などの洒水加持で使われる散杖と洒水器にたいへんよく似ています（図 11、図 12）。散杖はヤナギや桃の木の子などで作られる、装飾のほとんどない棒で、仏教の内部ではインドから伝来したものと考えられているようです。これらの共通性には注目したいところですが、一方で振り撒く液体は仏教では清め、アイヌ文化では美味なものを神に献ずるという点で異なっています。また、イクパスイはアイヌが作る木製品のなかでも、特に変化に富む美しい装飾が施されています。これに近いものは、むしろアムールからシベリア・モンゴルの諸文化に見られます。例えば、モンゴルやトゥヴァでは、装飾を施したスプーンや篋で、茶や馬乳酒などを振り撒く儀礼を行います。アイヌのイクパスイの形状や装飾は、こちらとの連続性で理解したほうが妥当なように思えます。



図 11 真言宗青蓮寺（鎌倉市）
の洒水加持



図 12 洒水器

仮にイクパスイとトゥキのペアが成立した経緯を考えると、①水や茶、酒などの飲料を撒いて献ずる習慣が北東ユーラシアに広まる、②アイヌと北方文化とのつながりの中で、飲料を撒くために装飾的な篋を用いる文化が形成される、③仏教・神道文化との接触の中で洒水器状の器が取り入れられる、といった流れを想定することも可能ではないでしょうか。蓑島栄紀氏は、古代に東北や北海道に密教文化が伝わった痕跡に注目した研究をなさっていますが、その可能性はこうした祭器の類似からも補強できるのではないかと思います。

イクパスイそのものも、アイヌの内であっても地方ごとの特色が豊かで、イコロマケネルの展示では、アイヌ文化内の多様性を示す展示をしています。いずれは、イクパスイについても通文化的な比較がされると良いと思いますが、そのためにも諸宗教の研究をされている方々との交流を深めていきたいと考えています。

おわりに

以上はなほだ簡単ではありますが、アイヌの信仰と周囲との関係性について、いくつかの話題を紹介いたしました。アイヌ文化研究と展示が、アイヌの信仰だけでなくアジア・ユーラシアの諸宗教をも照らし出し、それぞれの深い理解につながっていく可能性を感じています。お読みになった方にもそれを感じていただければ幸いです。また、既にこうした領域について深い知見をお持ちの方も多いことと思いますので、私の誤りや、知識の不足、視野の狭さをただしていただければ、望外の喜びです。

参考文献

- 今石みぎわ・北原次郎太 2015 『花とイナウー世界の中のアイヌ文化—（アイヌ・先住民研究センターブックレット 4）』 北海道大学アイヌ・先住民研究センター。 https://www.cais.hokudai.ac.jp/wp-content/uploads/2019/05/booklet04_hanatoinau.pdf
- 内田祐一 2006 「第 11 章 イクパスイの機能についての一考察—特にイクパスイの彫刻における機能について—」 『アイヌ文化と北海道の中世社会』 北海道出版企画センター。
- 大林太良 1985 「熊祭の歴史民族学的研究—学史的展望—」 『国立民族学博物館研究報告』 第 10 巻第 2 号。
- 北原次郎太 2007 「火の神の夫—apekamuy・cisekorkamuy・cisekamuy—」 『千葉大学ユーラシア言語文化論集』 第 10 号、千葉大学ユーラシア言語文化論講座。 https://opac.ll.chiba-u.jp/da/curator/900080862/2008no.10_105_142.pdf
- 北原次郎太 2015 「ikupasuy の口舌型式再検討」 『千葉大学ユーラシア言語文化論集』 第 17 号、千葉大学ユーラシア言語文化論講座。
- 金田一京助・杉山寿栄男 1993 (1942) 『アイヌ芸術 木工篇』 北海道出版企画センター。
- 久保寺逸彦 1977 『アイヌ叙事詩神謡・聖伝の研究』 岩波書店。
- クレイノヴィチ, E. A. 1993 (1973) 『サハリン・アムール民族誌—ニヴフ族の生活と世界観—』 柘本哲訳、法政大学出版局。
- 河野広道 1971 (1933) 「アイヌのキケウシパシユイ」 『河野広道著作集 I 北方文化論』 北海道出版企画センター。
- 定島尚子 1995 「日本における社会意識としての神観念」 『現代行動科学会誌』 第 11 号、現代行動科学会。
- 中村圭志 2016 『図解世界 5 大宗教全史』 デイスクヴァー・トゥエンティワン。
- 名取武光 1941 「沙流アイヌの熊送りに於ける神々の由来とヌサ」 『北方文化研究報告』 第 4 輯、北海道帝國大學。
- 三橋健 2007 『神社の由来がわかる小事典』 PHP 研究所。
- 蓑島栄紀 2015 『「もの」と交易の古代北方史—奈良・平安日本と北海道・アイヌ—』 勉誠出版。
- 和田完 1999 『サハリン・アイヌの熊祭 ビウスツキの論文を中心に』 第一書房。